

『罪と罰』第4部4章のクライマックス

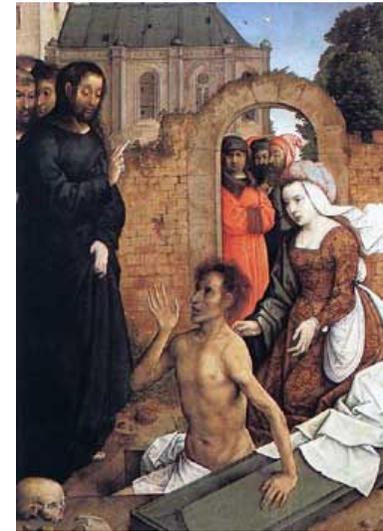
「イエスは、再び心に憤りを覚えて、墓に来られた。墓は洞穴で、石でふさがれていた。イエスが、『その石を取りのけなさい』と言われると、死んだラザロの姉妹マルタが、『主よ、四日もたっていますから、もうにおいます』と言った」

→彼女は、この四という言葉にとくに勢いをこめた。

→「四日もたって」の意味するもの

7 ラザロの復活





「ラザロの復活」における「黙過」

→受難者としてのラスコーリニコフ

ドストエフスキーはなぜ省略したのか？

→源泉としてのヨブ記

⇔『カラマーゾフの兄弟』のゾシマの説教にある

信念による殺人

「人は犯罪をおかすことで絶対者になる」 (カミュ)



8 黙過

РОДИОН→祖国を

・ロジオン (名前)



РОМАНОВИЧ→ロマ(ン)ノフの

・ロマーノヴィチ (父称)

РАСКОЛЬНИКОВ→断ち割る者

・ラスコーリニコフ (姓)

9 孤独のなかで戦う者

PPP→666

「ここに知恵が必要である。思慮のある者は、獣の数字を解くがよい。その数字とは、人間をさすものである。そして、その数字は666である」

(『ヨハネの黙示録』13章18節)

10 悪魔の刻印



なぜ、ラスコーリニコフを擁護するのか？

「一億倍の醜悪」が暗示するものとは何か

「太陽におなりなさい」が暗示する二枚舌

→取引を拒否するラスコーリニコフ



11 危険な予審判事

「なに、盗みのためさ」

「たしかに、母さんを助けたかった」

「ぼくはナポレオンになりたかった、だから殺した」

「悪魔にまどわされていた」

「理屈ぬきで殺したくなった」

「ぼくは、ただ殺した、自分のために殺した、自分ひとりだけのために」

12a 揺れ動く動機



「あのときぼくは、悪魔かなんかに引きずられて
いった」

「ぼくはあのばあさんを殺したんだろうか？ ぼくは
自分を殺したんで、ばあさんじゃなかった！ あの
とき、ぼくはほんとうにひと思いに自分を殺してし
まった、永久に……あのばあさんを殺したのはあく
まで、ぼくじゃない」

12b 揺れ動く動機



「その感覚は、発作のようにいきなり襲いかかってきた。
……彼はどっと地面に倒れこんだ……」

広場の中央にひざまずき、地面に頭をつけ、快楽と幸福に満たされながら、よごれた地面に口づけした。起き上がると、彼はもういちど頭を下げた」

13 大地の力

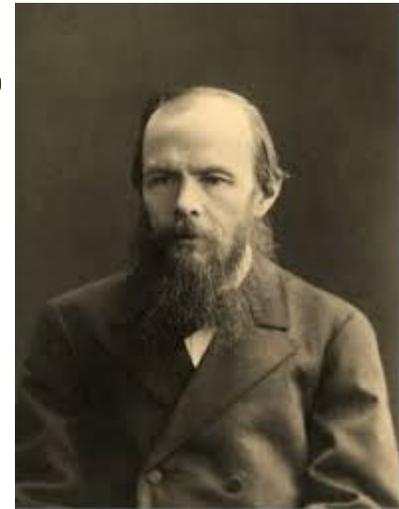


「全世界が、ある、怖い、見たことも聞いたこともない疫病の生贄となる運命にあった。疫病は、アジアの奥地からヨーロッパへ広がっていった。ごく少数の人々をのぞいて、だれもが死ななければならなかった。出現したのは、新しい寄生虫の一種で、人体にとりつく顕微鏡レベルの微生物だった。しかもこの微生物は、知恵と意志とをさずかった霊的な存在だった。この疫病にかかった人々は、たちまち悪魔に憑かれたように気を狂わせていった。そしてそれに感染した者たちは、病気にかかる前にはおよそ考えもしなかった強烈な自信をもって、自分はきわめて賢く、自分の信念はぜったいに正しいと思いきこむのだった……」

14 夢の力

現代日本の裁判制度下 ドストエフスキーの「救い」の処方箋は どこまで有効か

- 永山則夫(永山則夫連続射殺事件 1968)
- 宅間守(付属池田小事件 2001)
- 加藤智大(秋葉原無差別殺傷事件 2008)



おわりに



Спасибо!
